新累解脱物語

へ13
3912
4

門ヘ13
3912
4

新累解脱物語巻之四

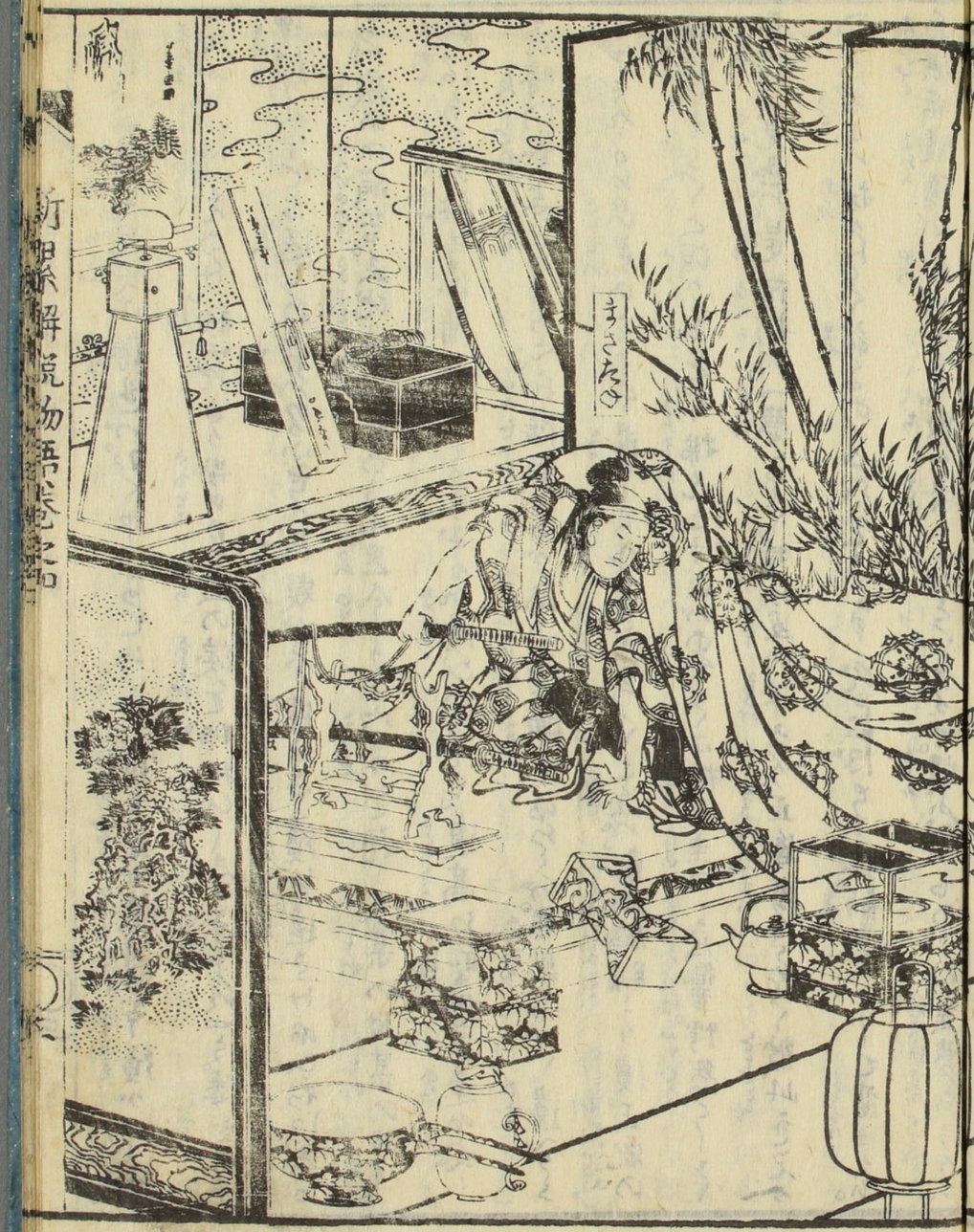
東都　曲亭馬琴纂循

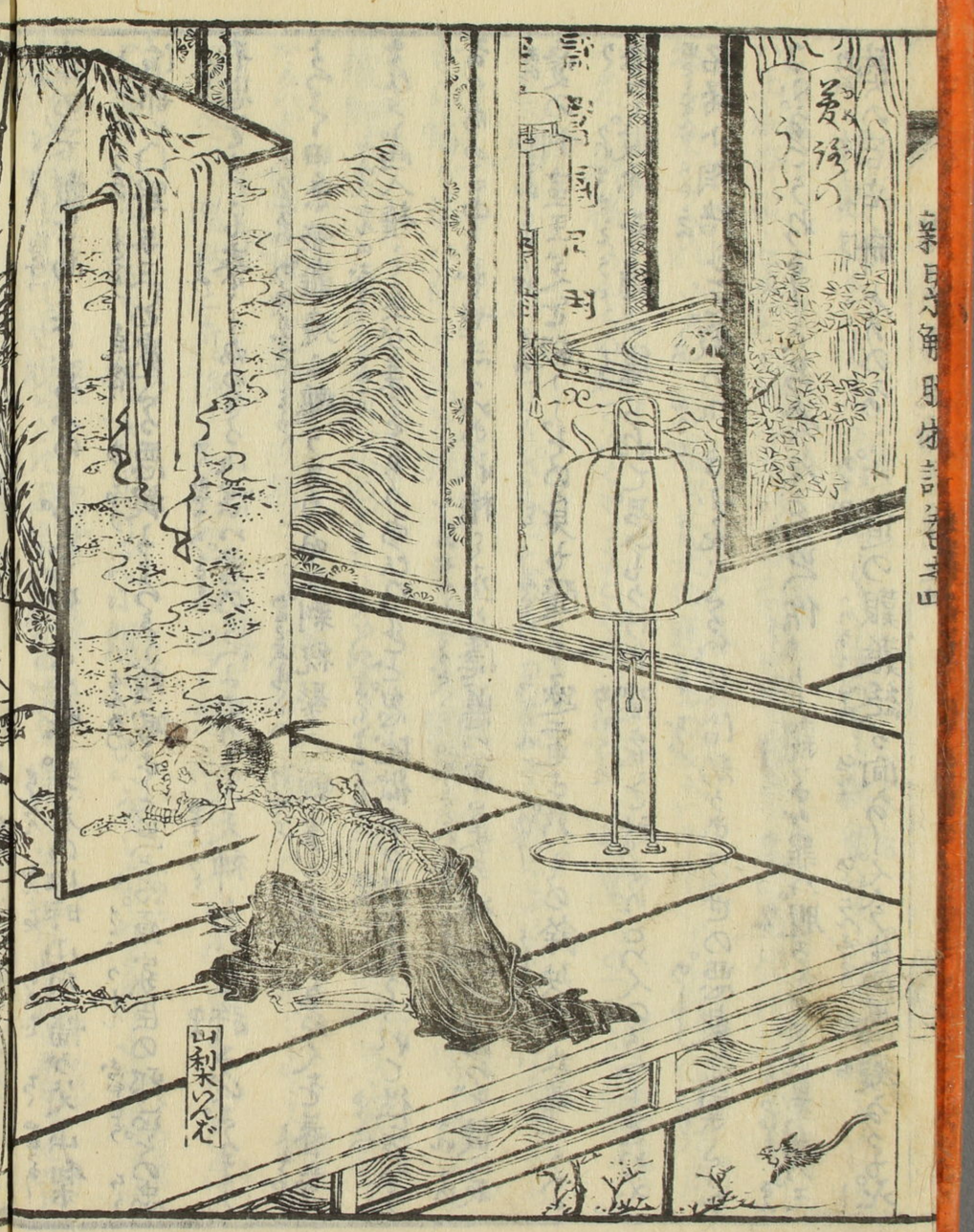
第七

正胤の便室に印幡靈を顕せ
法恩寺村に苧績仇を恋ふ

苧績はいふまく小媒課とうく。西入金五郎を罪なひしより。ふかる雲もなく。月の夕花の晨。正胤に扈従して。寵愛たゞめに弥増しつ。さなぐら夫人に異なるべく。ゆく行ぬ月日も立とやとく。今茲もうまうく次の年。秋の初風身に入む頃なり。正胤に持例ならざり。花に。針灸藥餌。種々の医療。等間ならどものする。五七日を経てもとこしおこたりにかれば。有一夜雨いと蕭然なるまゝに。宿寝の人を遠け。苧績にも要時の暇ぬかりてひとり寝もせらど寤もせらど。衣引被て坐しつる。燈火忽地滅んとしてく又明く。朦朧として枕方に蹲り居るものありけり。怪しやとて

首を擡熟視るに去年の秋落りくまづ剰留る。山梨印幡ありしが正亂岸破と反起て枕ふ立たる刀引よせを不忠の白従柯の顔めて幼よ及めうられさるこの印幡が亡夫の迷入出ありめうぐ〳〵ろがる苦悩〳〵虚小楽〳〵の躰格るんどの姿さんとそるまとそやうのめ〳〵と罵もめ〳〵とがを扱てすと切まこの煙のどく〳〵消うせてうさもとそとくりをおさめ枕をどんとまるふ処もまら〳〵印幡が姿ハ前よさのを跳くり〳〵。切まど滅挿へび迹よありく〳〵と雲う雨既が武藏野ふおりとこのふなる迸水のまそ〳〵るの元まぐ著纏へび正亂病苔ふ脱弱てあらいぜ屍吊ふ摸地とせ〳〵。忙然とくく垂〳〵そのこの印幡近くまそ。数回額づたつく潜然と并後くゃとそ。殿旦く怒をおさうてそれがゃんるをはメ石ふよふぐらさまの愚ありよう人小隣られのくなく爺やされ〳〵を怨ありそ及めうられ〳〵ぜ脱がうる因果の理をせそ進らせられめうをを紫りて黄泉の苦難を助うぐらふのこぴとも力〳〵とられど。先君のれ時ふ印幡が父山梨治部ど門野与三を寛る悪報ようふく頭領まと必ど。愚家臣の邪正その忠不忠とようくも紊〳〵ぬるれ悟い器のう〳〵よめうく。天神これを許さぐさるようく田糸姫難痕の醜うりぬび。剰祝髪の願事ようぐ〳〵ふ及人を着悪ふまふく。西入権こ及が妻とありぬひぬる正ど。忽ち彼ふがふさられて往方ありめのよめうぎやうつめれ権こ及の愛の側室王文を殺〳〵その身も隨うく迹電と乃その餘映金五鼎がうつふ係こ。彼亦节績ふ獲られて。ぴもうけめ隔衣を被うこの人のうつ正い又妬婦小相結ふて。殿のれくまふ死〳〵ろ。父治部がありし世の悪報を稟ふるふのごうれろ〳〵とろめべ。とろく作り〳〵親ふが罪ふ。脱ろくろも夏虫の三熟の苦亜滅ふありの〳〵六道の艱難経る向の〳〵人今生小愚凝るるも。死


さざえ


山梨いんぎ

しきくはその夫れ夫に勝れば。かくやすまてゐとて。權ゝ丞が隱慝。苧績が奸計。
る事。雷に咲えあげ。細ゆだらう学ぶもて。血の涙を押拭ひ。くまて亦やはやう。倭文の苧
環繰へしても。返らぬ昔ハいろ小せん。只疑ひこゞ速ま苧績を遠ざけぬひねじ。しかし
らば殿の此病苦。立地に平愈あらん。且今より六年を孫ゝ。某の月某の日ゝ。
飯沼なる弘経寺に指あらば。そのうぶる此詭びありゝく。道高に聖僧に逢ぬふべし
その時門野与三ぬさらし。印幡親子が為に經誦しぬれば。君恩なかゝ遺べから
ず。やさんへかの只是のこと。ぞや退てもてんとくすつくと立ば。鮮血胸膈より潰。正亂の
膝上に。たらくと振ひるを。折拂んとすれば。あやまくに。枕土圭の一声響愕然として
驚れ覺れば。是楠柯の一夢なく。時ハ丑の羊なり。正亂夢さめて彼此をこえか
へるに。太刀ハ抜かけて前にありぞ。ぞとおぼせしが。袖うちかへして変するに。
白無垢俄頃に色めきて。血に染るがごとくなるぞ。疑ふべうもあらぬ霊夢なりける。

鳴乎痛しかなるる妨ハ。杵ゝ丞に陥られぬひしを暗ぞ。這奴が偽の遺書をあり
とて。金五郎をほとりちから召仕ひぬるとて越度なれど。遮莫今より權ゝ丞が
往方を蒐索め。縁故を正さばやとおぼせしがゆゑく斯あつれば。こゝ妨の再
びこゝりあらはもあらじ。このゝ世に小ぜんハ亡父の恥なり。もじゆにそれとあらぬとも。既
に金五郎を罪しられば。もとしハ憤を散ぜに足る。只うち捨ぶるにハ苧績がなし。
これ不肖にしくに小惑ひ。ゆゑく家名を汗さんとも。これ過ちり。これ過ちりと
ひとりこち。夜の衾に比翼に挾え。並る枕に連理を契りしも。忽地疎しうおぼえ
て。明るを待ぞ猛に老黨を召つとへて。是彼おちもなく說ましに。聽て苧績が
罪を責て。故郷へ追放さる。苧績ハ密計既に發覺。陳ぶべき言語もなくて。
頭ぶに擡ぶるをとゞくといそがしこと。詰朝二三人の走卒に送らして。下總なる法
恩寺村に追ゆさる。苧績ハ彼処に到るも。故郷人にならぬんが影護さに。顔の

紅葉に袖をかざし。父母の家さへ閨高く。絶えて久しき對面をうれしともいひ
かねたり。清三郎夫婦ハ。どひもかけど。苧績が窶くしくてかつり来たるをこころに
ゆく怪こゝながらさりともとどひて。まづ恙なきを飲び申え。送来たり千葉家
の走卒ホ没。叮嚀に歎待しく。長途の疲勞を問慰めなどするに。彼們清三
郎に對て。苧績が罪の本末をいひたり。倘男子なるらば首刎らるべけれど。女子のことな
なれば。何の制度もなく。斯故郷へ帰しなるに。厳の仁慈なるに。ふかれり。かならず
しも等閑にどふべからずといひめしけに述をかり。ずゝく外の方に出たり。父も母も
そのことゆへしより膽つぶれて。顔うちつゝあらしつゝ。苧績をほとり近く招き。やよ
女児年来厳の仇をなしも。化に勝たりと申えしほどに。世嗣の仇子を産せて
らば。ところの隨に老らくの。ことが世をさんとどひつるに。これはまたあまりのことぞ。婦
の嫉妬なるに。百の拙をも覆ふとかなくより申なるよしなる人を恨しより。

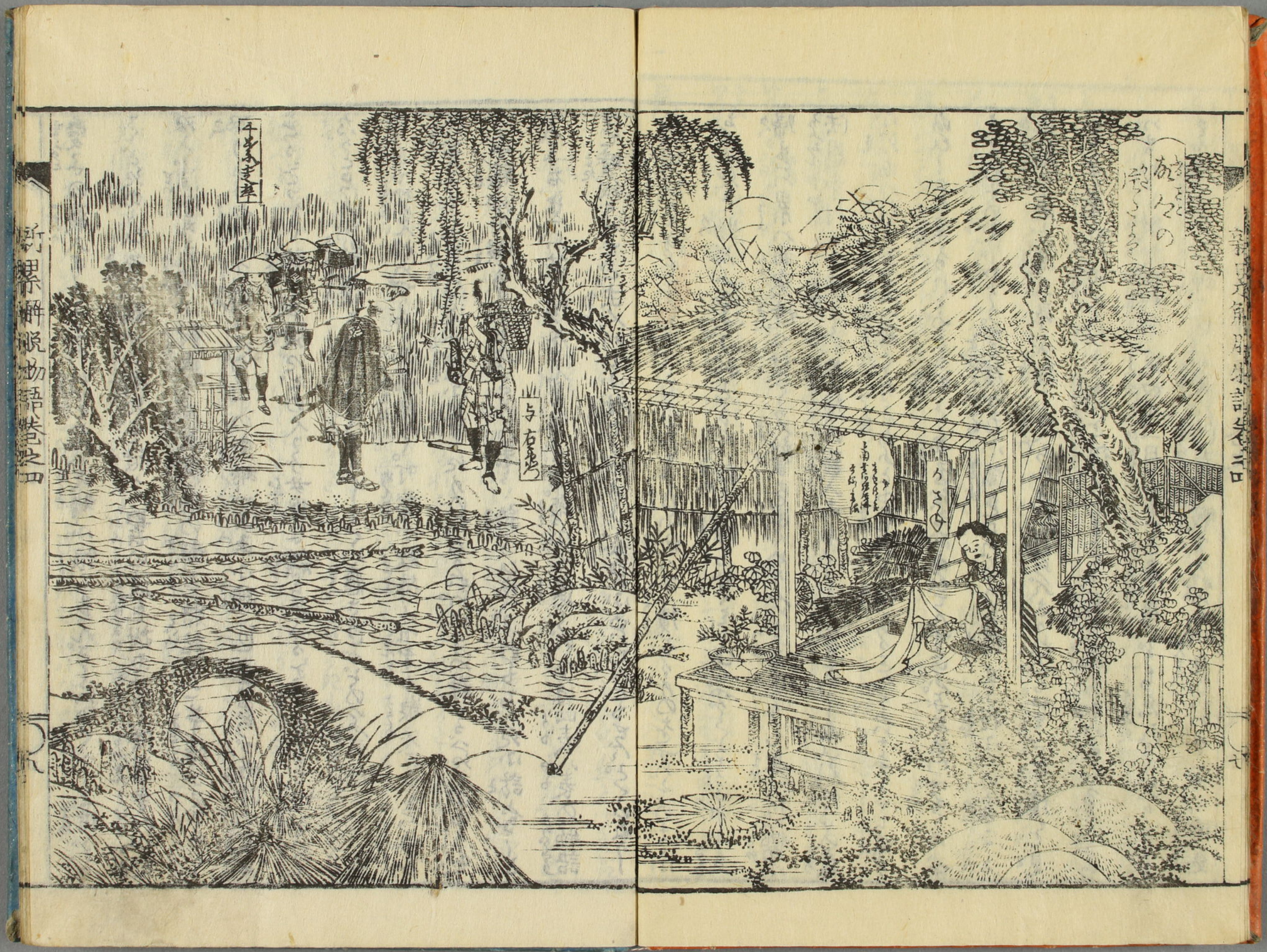
ことが袖ぬらしもなかしぞれ。この過を數られ。追放されたる鈍ましさよ。百遍千遍いひ
懲しとも。そのかひあるましもあらねど。このことは世に洩れてく。与右衛門に申ましんも面
目なしさて。おとせんとてくうち腹たち。互に右より左より席をうちたてくれ口説ハ。
苧績はなく後悔し。かしこまりてぞ居たりけるこの時しも与右衛門は織越の家
に入壻してより。既に一年に及びが。鄙に馴てもたりしが。憂は弥倍に羽生の小屋
に。丸木柱の朽果たく。花さかぬ身成たるなれど。累が醜れに似げなくて。操自らしく
舞眉なれど。早晩厭ふんも失。こまでや過世の縁しなるく。やうる魂婦に偕老の契
締ぶよとどひたえ。いと睦しく相語なる。累は元来糸成繰いと布を織こと成
ようするのことなるぞ。縫刺の巧も勝れたれば。彼此人に傭まとく。対とる所乃に日
成送る。されば唐の秦韜玉が貧女行に。最恨年々壓金線為化人作嫁
衣裳と。申えしも。どひ申られたく哀れて。これはさてあく与右衛門は。ある日秣刈

らんとて、鎌を腰にし、籠を背おふて、家を去るといまだいくばくならざるに。忽地法蔵寺の辻にして、はからずも相識ある千葉家の走卒ども行あひけれど、身の窶々しきに恥らひて、横さまに避んとするを、他們とやかく喃と呼かけて追ひ来りつゝ、別後の安否を慰問し、さてのたまふ。寔に人のうへの果敢なきかな。今はさしも栄へたまひし、身にしあるに、時にあらぬかな、西入氏の家子に在しが、父後は諸士の長ともなりぬべきことに。人にも羨みられ給ひつるに、女のなりの奸計に陥られて、かゝる羽生にさすらひたまふ縁故をば知りぬれど、とやかく与右衛門さまは顔ばかり、賓まで其故を知らねども、ずつ向べき。おのく行くものありちかごろへは来まさるを、おぼつかなくとて、いでや一人の男信ぶちて。云々そのよしを。吾儕にも来まされ、苧績の方を親里に送るとや、けふも仰を蒙り、今彼処より帰さなり。汝身も豫て精しからむ。彼姑婦が去年の秋、山

梨印播を簇ゑ相語らふ事のよしを、發覚て殿の憤りはなはだしかりしが、日来金銀珠玉のかぎり、縷造りなる調度はさらなり、衣服匳梳に至るまでも、身に著たるのみ許されず、直に故郷へ追やられしが、その故は如此とぞ聞えし。首尾を説あかし、今ぞ分るゝを辞なく、ばとらしは根も葉もなんどの事には、与右衛門じやく荒介とうち咲ひ、かゝる實の罪を知りしや、苧績が所行なりかしと。猜されざるにはあらねども、印播が並びに在るをも、みやうぎくやうくにはずかなく、長く左近の身となりぬ。されば今はかなき月日の照らしなる時もありき。身に過にける殿の知召さんよしあるへきにもあらずして、程もなく、さしも舊好を忘れじとよくも告知らせよと、懇しくとぞいひけるを、彼男苦々しげにうちなげく。眉根をよせ頭を掻ば、否さのみ誇びなへそ、寔や人のいふを聞くに。なかなか権もそれがし、箇様々の較計して、田糸姫を追ひいだされたる。

近曾西路顕もとといへども。既に夥の年月を歴さるに。縦ひ身親子を罪しなふとも。田糸姫の帰りなふにもあらず。世に学えば古殿の恥なりとおぼしうへしく。仏の制度もおつしまさねど。いつでらは身親子を憎しとおぼさゞらん。鳥の頭は白くなるとも。召へさるゝ日はあらじとぞいふなる。さるそらごのめせんよりは。耕私のるゝなる懈なひそといひかけるく。聽こゝ袂をうちたり。与衣歩いつくづくと。しばし其方が目送りたく。一トさびは苧績がなる成仏持よしとし。又一トさびは父の舊悪によつてこそ。ことに身の發跡なる成を悲しき。ひとりこちくいつりなるは。田糸姫の往方なくなりなひしは。ことが未生の時なるにこそ。いなる故ともしらざりしが。三年已前の六月に。親族うち揃ひてく船拵び也。夕ぐれ父内糸姫と一声叫び忽地母を砍殺し。剰その身逐電しなひしを。しひあはれば故あるなる。そもいかなれば。ことが身かく腹あしき人のなと生まれて。

この煩悩をなせるぞ。父はともあれこうがたに。仇は苧績なるものをやはそのまゝに。おくべきと物しなふ。私る謙もすくしうして。やがてことが家に立帰れば。累は曲突焼つけてく夕餐をまくや。ゆゑは生平よりも早かりし。嚮に法恩寺村より使しこく。苧績の藪入しなひしとて。告来しなひね。仏なるの意に。ゆゑはあはれにや。日来は疎く折ゑなふとも。見はいと稀なることゝ。ゆゑはよしやくさち帰りなひしこと幸なれ。ぶからはいく安否成も問なひてんやといふ。与右衛門やうやうこれそのまゝじやより。苧績がたに隠せられたりと猜せし程に。この家にある由縁あれど。清三郎に親に交らんなるをもつべ。しかれども。いまだ苧績を見たるなるなれば。折をはしく怨を復んとまとも。面を認らざるまゝなん。さらばまけぐ彼処に到れて。這奴を一目うんだやと尋思しこうち点ぬこゝいつりなるを。ことが清三郎許疎かりしは。貧の活業に暇なるれば。ゆゑ身にいはるゝごとく。邂逅

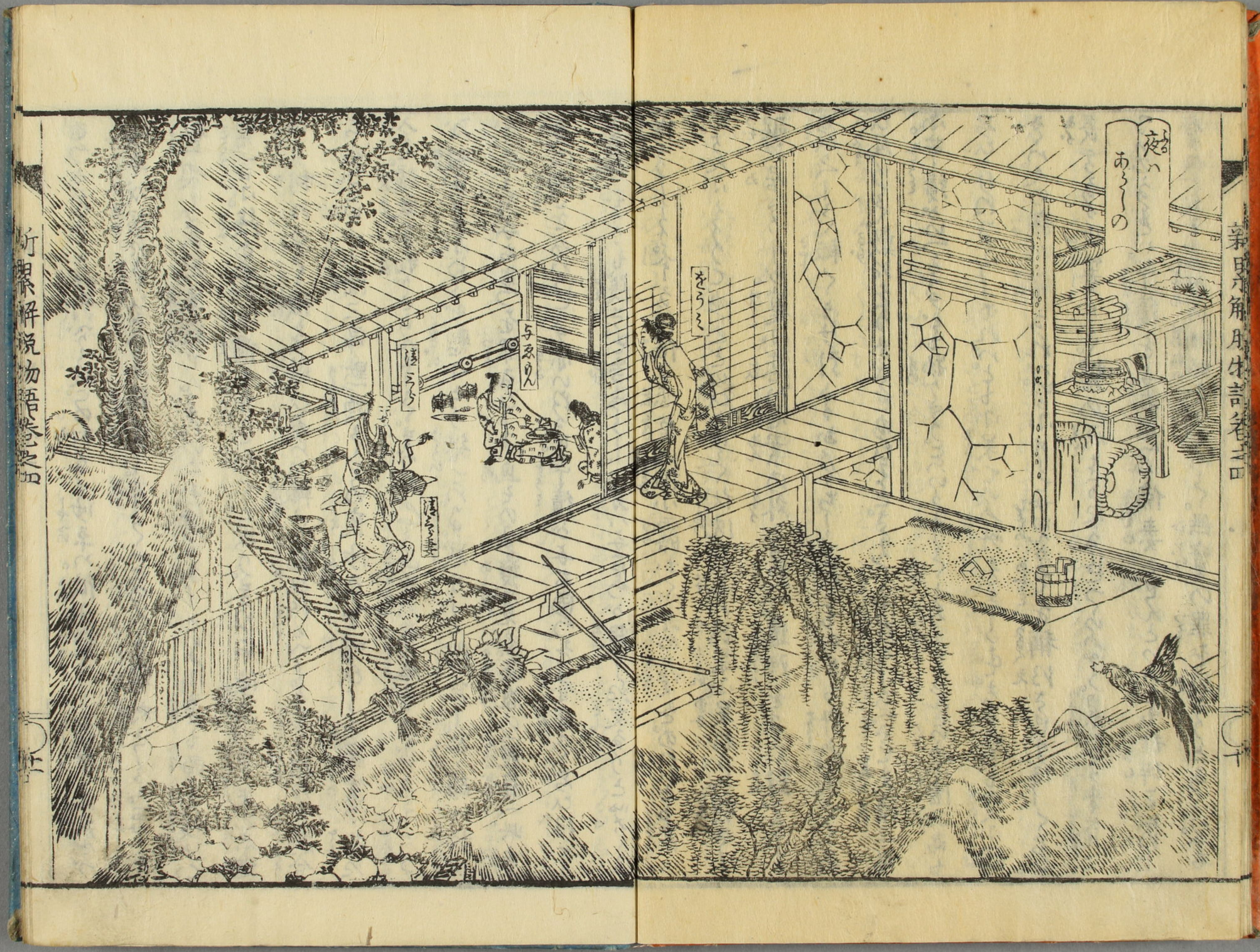


千葉支率
与右衛

愛子の数入もし。ふそれもいぢの彼夫婦ふ恨らるんさらべゆくべーと信ぢっ
そくとゐあらじ衣の粘いと剛ひを彼う。髪の後も掛ゆげつ。法恩寺村ふ赴
ひく。清三郎夫婦ふ財面し。日来疎遠の懈を賠話さこ芋積が恙うく
ねうる餞びを遊るふあくの夫婦ふ生平ふ疎うじ右歩つ。俄涙ふ来さ
ふるをつそく胸うう騒だ。この人ふぢ女児ふ謀られさるをゆるやこ恨をいつん
ろうとゐふ。影護と限そるく。ぞうぐーくふ應ざりぢがこの所穏ふ。遥趣
あうとも変えれつぷうやふ妻堵く。叮嚀ふ款待し。四多が艱父子ふ生ふ
従等すく。累いつぐ女児ふ等すひのぐ。これもちろひふ訪ふぐーと
ようや稼ふ暇るくそも。疾さうふ未く語ふひゆ。これもちろひふ訪ふぐーと
ひふ。ふ右歩つふ芋積をえまうほーさふ。頭ふも退ーべなほ四表八表の物語
ーそ時彼うつど。主人ふ。ふ物ゐ彼ふくふ。女児ふあひせんとも右べ。とくられう
とゐふ気さるふ。ふ右歩ふはさぐるくて。今愛ふもよひふ。とはえおぼ
くふ立うりね。あるふ芋積ふ与右歩つが来ふ迄とやくく。安ふぐどふぐ。その
られん所もおぼつるれが物の蔭よえうられく。密ふ腕窺ふべ。ちでめ憎ー
とふるふ似せ。貌こそ賤の男るれ。これふ烏帽子被もるとも。敢おうーめ
ぐふ美男るう。實正亂の寵愛ゐうふ迄も理ぞうー。女ふと生ふてゐりぐ
ふかくる風流士の妻とるうて。一生をるーるべ。ゐの負ーふも厭ま。とゐおふ
彼人ふゐ累とふ妻ゐうくふれとふ薔ふ仇るふうーその故いちぞとも。
ふとうんふ影護ー。どひ絶ても堪うる。浮くる恋の迷ふべ。これうう狂ふ意
の駒。絆も断ふとく懇ふ。結留ゐれ縁ーるべ。散ちく花の雪よりもろぐ
身消よと呂顧ふ。ひを焦ふとのこまうくふ。この父母ふも。ひちーをべれ
よすぐるれべいつとるく起もやーど。即もやで病む程ふ。父母いゐく愁ひく。

醫療残るかたなく勤むれど。そえたくその驗なく。日にくにひほそるまぞ。ぞう
ぞく思病なりとんつれたく。有一夕苧績が母。枕方ちかく声を低うし。行ひ
の物を思ひまるかはしたらねど。此身が気色のんりとなさよ。りし石濱の此館に
ありしとは。眷恋し人のあるまはあらぎや。千々の宝貨にもかへじとおもふ。ひとり
なのみにしあれば。爹もいと憂ぞおぼしたる。母には匿ゐぬまじ。倘君にましは
なれたらば。ぶらまなく笑えぬべ。命にかゆるなやはあるやよくと問るに。苧績はい
くそ変いはんとしたく。とにかくにいひかねるを。問ひたるほしがくなるに黙止かたく。
いねる日与右衛門を闕窺てより。心持惑ひ。頻に思ひを焦しなぐら。彼人には
妻ありたく。ひが身故に左迁ぬべば。結ぶ縁に由なれをかくうち歎くにたく
侍り。りし父母の慈なく。彼人の妾ともなしぬべ。枯たる枝に花を開し。
砕たる玉の圓になるかごとん。いかなる過世の因果にや。えざるたじめり

憎かりしより。今にはは倍る恋草の。袖に露おく身の憂をおられとも商さ
ばよれにたりてぬれと。いひかけたく伏沈めは。母は呉に呆れたく。顔さし
訳は居たりしが。寔に恋は思案の外とかいへば。道理をかく説がたしと
思ひたくしたく。輙くうけ引たるおもくちし。それともかくも計ふべし。かくに
ひ屈りたく。歎れをなまさせぬひそと。さまぐにいひたしらべ。さて夫清三郎
に。苧績がいへるなども物がたり。といはるにしたくよろしからんといふに。清三郎も
思ひかけぬるにしあれば。とも不呆ていふ所をしたらぜ。しかれども愛に溺
るくは。人の親の常なれば。いかにして女児が尾を稱ゆさせまほしくおひ。
長ずるる火箸なたく。爐の灰をかれなるにつくいふ。累はるが守育た
るものなれば。苧績を与右衛門が傍妻とせんといふとも。推辞と成ゆじ。
しかれども。ひが女児の物妬に。によつたく。無實の罪をゆたりとしたらば。与右


夜ハあらしの
をうえ
与ゑりん
清こう
清こう妻

歩つさえくうけ引べくぺ。この村の沙平ハ。彼が親〳〵交秀とやぶさ
ぬ仲なれバ。序よくこゝろくを媒妁ようく。事を
整のべ〳〵さいく成就ちんするのとおぼつかなう〳〵とハ。妻も頭を傾けて。
常言ハ。浅ましき木偶も面を和ぐとやらん。ものこゝろ沙平ハ貢米の未進
あり。利分ようく彼を誘ひ行べ〳〵。ようく招ぎ諧合
ちのくとのゝ。清三郎黙頭ようくその夜沙平を呼びよせて。閑室ハ招ぎ
入れ。縁故を物がたらんとーようく。まづ男ハ思慮のうく。さかハ大事
我明もものかはぞ。憖ハふとり縒こそ。成ほど深念〳〵。芦績が物妬
ハ。ようく。ふた右衛を罪るひしる。貝その発覚ようく。正徳の寵妾〳〵此度
身の暇をあらしとる。ホいかる日芦績が子右衛つを着恋ようく。ハひほそる
るぞ。ホかぞうも残さど告ぎろ〳〵。四月ハ子右衛つが親〳〵友のりとゆくよ。
まづ何とぞく彼が肚裏と探てようく。曇ハ芦績よ導られさるをぞるやをう
ざるやようくその気ろをえ定めゆく。彼のよくさるををうざハ干ため。
女児が願る究ようく稱易し。ちろ〳〵とハ。四月が去年より貢米の未進ハ。
これ償ようく進らとべ〳〵。ようのようぞ〳〵もこの由をかろ〳〵ハ偏〳〵ゆゆるとこく
ずハべ。沙平ハ文ようくこハけーようくぞと思ひるのぞ。村長の叮嚀ハ頼こゆる役。
すぶ推辞ようをゆぞ。仰うけゆりひねぢれども。かゝる歩行を速ハせう
もるぺきの破ようく端ぺ。縦ち右衛つハ仇ようく〳〵きぞおうとも。累の世ハ決ゆさ
醜婦ようふぞが夫よ衛妻をめ〳〵せこぞうぐのねよ〳〵ちんざ〳〵ん。ちろうこと元
口舌絶る間ようく。苦況ホー愁を添るゆりとも。ホハ笑の日ハ稀る
るべ〳〵。ちろも某よ并ホろ〳〵と時の到るを待ゆ。今宵のゆぞようくハ俄
をとようぺ。ゆハ慢ぞ地詰合いようくとて退出ハけるぶ清三郎夫婦。

げにとおもひて。苧績にもよくそのるをいひ諭し。縁しぶにあらべ。孔子が言ひ
稱ふべし。よりや一年二年徒に暮しとも。ろうれものにあくまゑいと遥なる。ふ。
あゝ日ゆくのこゝ小物に紛れ。こづから保養しあへりとはへば。苧績はいかゝおぼ
いかなくて。ゆゑ便もなく。ゆくゆくび与右衛門が来るやとて紛てども。その
後は影ぶにもぞ。亦沙平が好音さへなりと。空えし程に。あくるをうしなひ
なり。

第八

城隍廟に清三郎們訝鼓戯を奥を
絹川堤に与右衛門加佐禰を殺を

清三郎夫婦は。苧績がまもしくおひほそる。ゆゑくゆく愁ひ。何にまれ彼
が心ゆ慰るやうやあるとて。さまざまに談合されども。この処は都會の地にあらね
ば。傀儡俳優の徒はさらく。物の調に妙なる琵琶法師もなく。又和歌連歌
など嗜む風流人も稀なれば。ゆゑ心ゆらんくさだひとするものありともおぼえず。
されば。とくとゞに己べれにあらねば。清三郎とさまかうさま尋思して。百一日
その妻にいふやう。ゆゑ村城隍神の祭礼は毎年の八月十二日なるに。むりしは
氏子の少女ホ。社頭に集合て訝鼓戯をなせしよ。このゆゑ久しく絶えく
なし。これこの秋は一村にあまたく訝鼓戯を再奥すべし。かゝれば苧績にも
さるやうに打扮せて。彼此人に目ゆ覚させるのん。このゆゑいふ思ひあふといふ
に。妻は字もあつぞ。たゞ飲び。りしさる遊びを催しあはゞ。それの稽古。これの
試楽は日数程ありて。女児が物おひもかはまぞるく日妻なるべし。しるるとゆゑ。
彼が為の良茶。これにまもりのなし。どくゝおひ立ぬひねと薦なる。さて清三
郎は次の日俄頃に郷人を集合くいふやう。城隍神祭も。さやちるぶれぬ。
今茲はまれたく冈の登よろしく。稀なる豊年にこそあれ。是併神の獲た

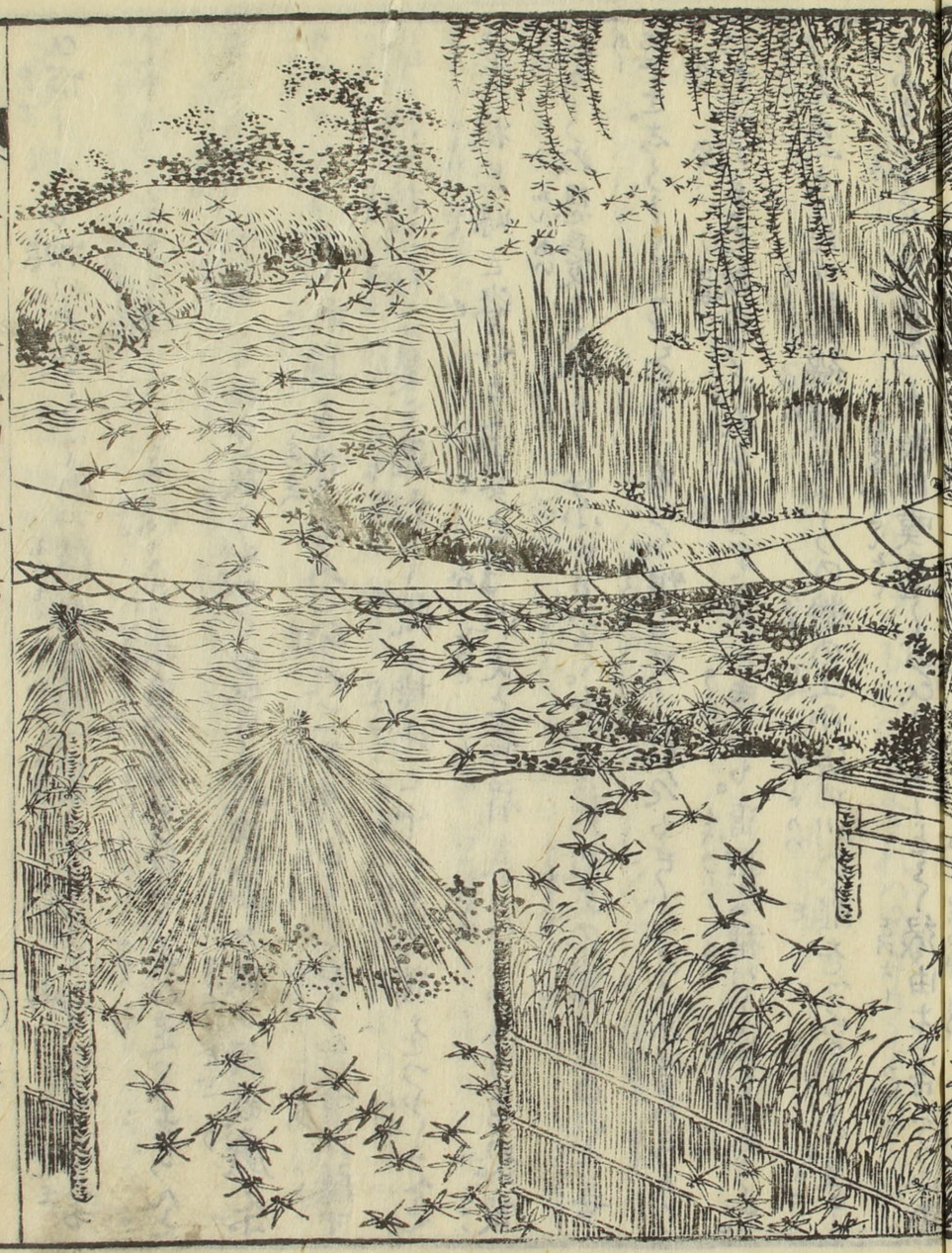
まのふよをぴん〳〵絶る狂言鼓戯會を興行をべくそのぐ女児ども
人ハ俄らさぐ出〳〵ぬ〳〵よ。笠ハ近曽このころうもりのもる。都の富士とろ
いふ。菅の小笠小ぴろ〳〵の造花を著る。一般よ戴し。衣裳ハ倭文
麻布をいろ〳〵人の貧福ふろ〳〵。よ。狂言の風流を盡さるべし。来ル十一日
ハ雪宮ゑれが。暮過ぞおの〳〵社頭小集會し試楽あるべし。こいと晴ある
所為ゑれが。此〳〵村人よ笑止ざるやうよ。秩音おゝ〳〵ちほ〳〵とめべ。裏人う
ち〳〵ころ気をおく〳〵。一人の男もそを出この狂言鼓戯會の廢るを幸
意あ〳〵もらひつゝ小。此度再興し神と人との慮小稱ひく〳〵。ろが村
藝會の祥あり。夫狂言鼓戯會よ種々あり。洛北修覚ち村の題目ハ
ろ。老女ぢら法花の題目を唱へ北岩倉の燈籠おどりハ。吹女ホ頭ろ
燈籠をいろ〳〵紀ハ。幡の社頭小集會とど。或ハ神風の伊勢おどりハ。松坂
音頭よその名高く。信濃ある岐岨おどりハ。山吹も出つべし。いく群うゑ
成引あり。小町おどり小懸るハ。此ハ返おどり小習あり。この外山城の念佛
是一体の風流ろ〳〵。唱哥他よ異ゑれど。ころ女ゑハ同もろうど。今
吳山寺領の葉山ゑ婆〳〵法藏寺門前の苗代比丘尼のこおろ〳〵の評
鼓戯ゑ出〳〵ろうとゆべ。彼人小相語〳〵。秩音古のさゝん
ぐりやとぴと信ぐちそのふを。清三鼻閉〳〵笑坪よ入ろ。この言究〳〵理お
そぐ〳〵用意ちぬ〳〵とのそぐ。ハ。裏皆ころ行果〳〵退出めがりゑれハ
清三鼻小。縁由を苧績よりひきゝ。狂言鼓戯衣裳小繕ろやらん。又練
ろやらん。ゑちのふぺやゑ。ゑれど苧績小がろ呼ろ
ゑちゑちおど。霄宮ろの他の村よりも。群集ホ〳〵ころとのべばり〳〵よちぬつ

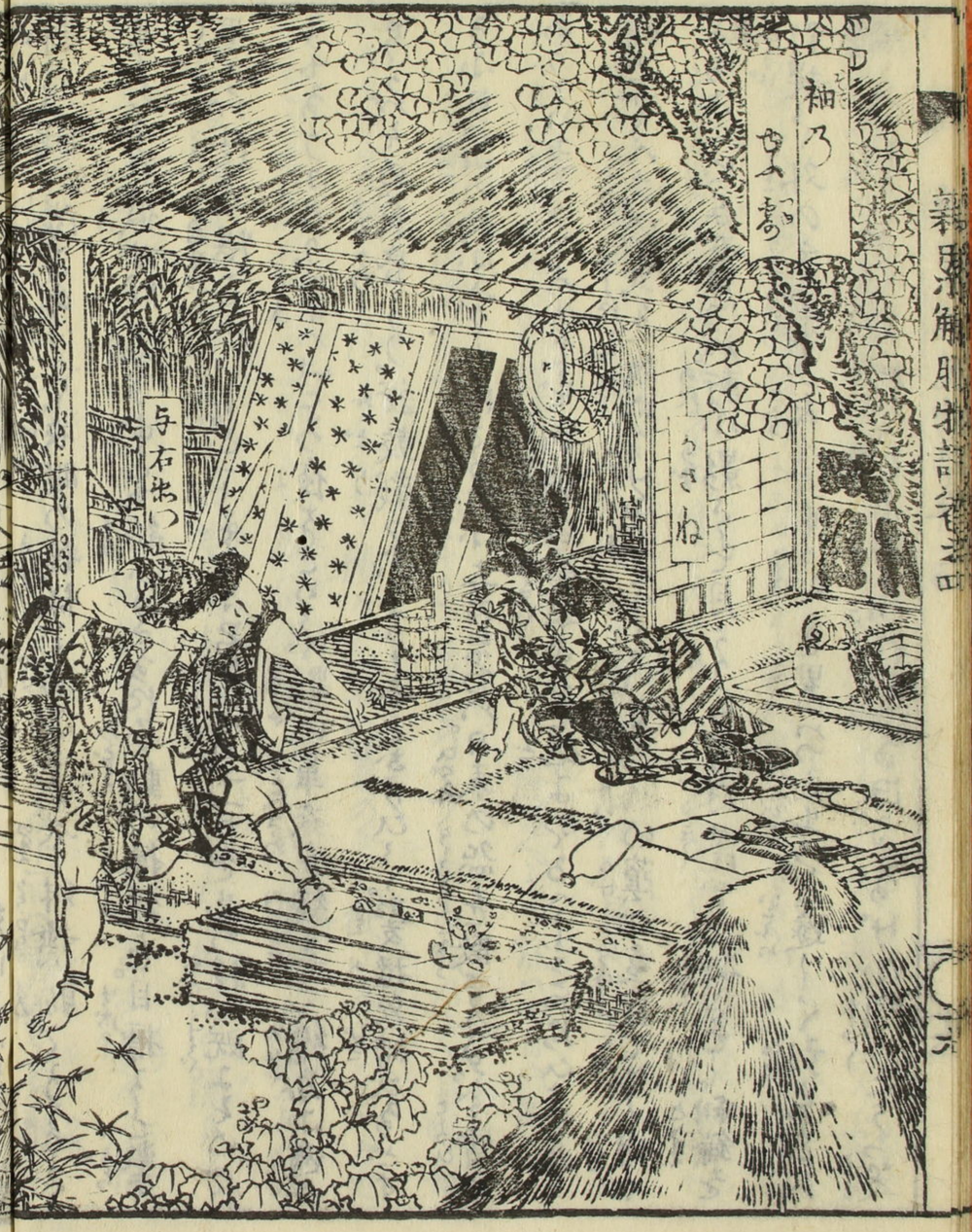
小逢ともめんとおりふしよみぐるめもあらわ。毋まも何く絆掻をつぼめよう。草衣の染摸様いさゝ。縫刺のうくまぐもよう意をひさせ又峯山まき婆こ小物とゝ。弄曲伐ろひ。りつまゝ本日を終ろうる。さる往小郷人。城隍神祭の詩鼓銭會。今茲ろ再興をとゆく。終と限こるう。女児うさぎるものゝ。外の村ある姪あご傭ひちらばまけ。魂の親こ終。おりひの准備ち行ふ。絆掻の藍壺小隙あく。落屋縫屋が舗。それが乃小賑へう。ごふ与左歩つが妻の累ハ。針とる巧小勝をされば。かくるあくとも縫屋が針小おつるこ。彼を傭めと常ある小。まくく日数を限ある詩鼓戯衣裳を傭ぐるもくぐ請負ーうが。縫屋の男。殿物駄沓負来て。累うこゝろ。これ法恩寺村の詩鼓銭衣裳るれば。十日のタぐれまくぐ小縫こそ終。うべ。事違ひそのとくこそぐ。員数めくにやくく受とうのくこそく。秋の端鮮

掛ねつゝろう生そをこをびゝづれもそる際色まく。ぜころ流行る謎こ。とおぼーく。菊名の据摸様よ。携斧と琴と繍もてるゝゝようをこをくといふこうるべ。或ハ細輪よねの字なの紋つけく。草刈鎌を深こうゝゝゝと。の意ゐや。或ハ合の字四ツむろう。おの口こく。葦の紫小ゐの摺箔もそろ四合せとーとのゐやめーん。又謎くるのうぎ。鹿小紅葉小田よ雁桔梗刈萱女郎花。紫おり縹縞めりてぉとゝぎ勝らぎっをそる中よ。ぜく一際異あるハ縞小不動尊の。横さまう小這ものゝ。飄の核小等ーぬ白ぬ奴凄をめくうるあそろう。眼ゐいろめーう。揃箔ーく。炎燃出るもろう小彩色こられば。累いんて。顋然とうち笑ひ。こハ何とのハ謎ゐやあーへさても異ある物数奇うる。何人の女児ゐかゝる単衣被くく歩るゐやと問よ。縫屋答てこれハ法恩寺の村長なる。清三郎ゐの女児よ。芋績とゐ美女の深さをゆゐとぞ。深るゐが直う

縫させて来せよとぴひあつらへおひねとらく。絆掻よりこが方へ遍せしなり。宣ふ
どく。世にはさまざまの物数奇もあるものよしのふ。累ゆゑて。さらくは彼女子の単衣
小こそこが身元来親族なれば。縫せんとならば。人づてならずも頼ゆゑもなきこと
よ。なまじとおもへばこそ。縫屋には縫せるならば。さらば身小代ては。物ほしれ
あるなりと。ひろれんも影護し。見れば身が方にて、縫ぬへその餘は十日の暮ま
でよ。ぐら揃ひく進らまべしと應せるに。縫屋はまゆくところ。身幅被
袖ありしなる。冊子を残しとぞ苧績が衣裳は舊のごとく。袱小巻こめらくりて
ゐるを。与右衛門方にありて。麗朶伐とるしつく耳を側ひ。忽地小ひゆゑ。
これいぬる日。清三郎許ゆゑなるは。苧績を怨らん為なれど。彼ゆゑ隠せしく
終に出ぜ。その家には奴婢夥あれば。縦名告あふたりとも本意を遂んとおぼ
つかなしとおもふから。ふてくびけらぐ過ぐる小。幸なるかな十一日の霄宮には。彼も

訝鼓戯の隊にありて。衣服の摸様小ゑるまぐ。今絆掻が物がたりきてとく
ありぬ。これ彼女我怨らぜとも。紛ふかたなれ不動の摸様を。目標にして撃
果さば。縫ひて悍をあらじ。と一トまぢ小ひひ定め。十一日をまつ程小既にその日
にもありにけり。累は此ところ夜をこめらく。夥の単衣を縫立ひく縫屋小遍与
せしかば。その黄昏より。訝鼓戯にはかりだやとおもひらく。髪掻れ結びなどす
るに日は山の挾に入りぬ。さる程小与右衛門は。日来の怨を散さんなり。今霄小
ありとは妻にもしらせず。利鎌の寝刃あらせ砥に。かくるべしとはいひよらねど。
何とせんと夫の気を故ありげにふんえしかば。累は物の蔭に立在て。さし張く
とも志らで与右衛門は。軒小影さす月よりも。なほ晃なる小研ぎそし。利鎌を
引提ひて外の方へ走り去んとする処を累はつと出ひて遠しく引とぞ。とは
怪しれ気をこらく。いづ地へ行ぬと問れてもなほなるげに。呵々とうち笑




与右衛門
柚乃
春

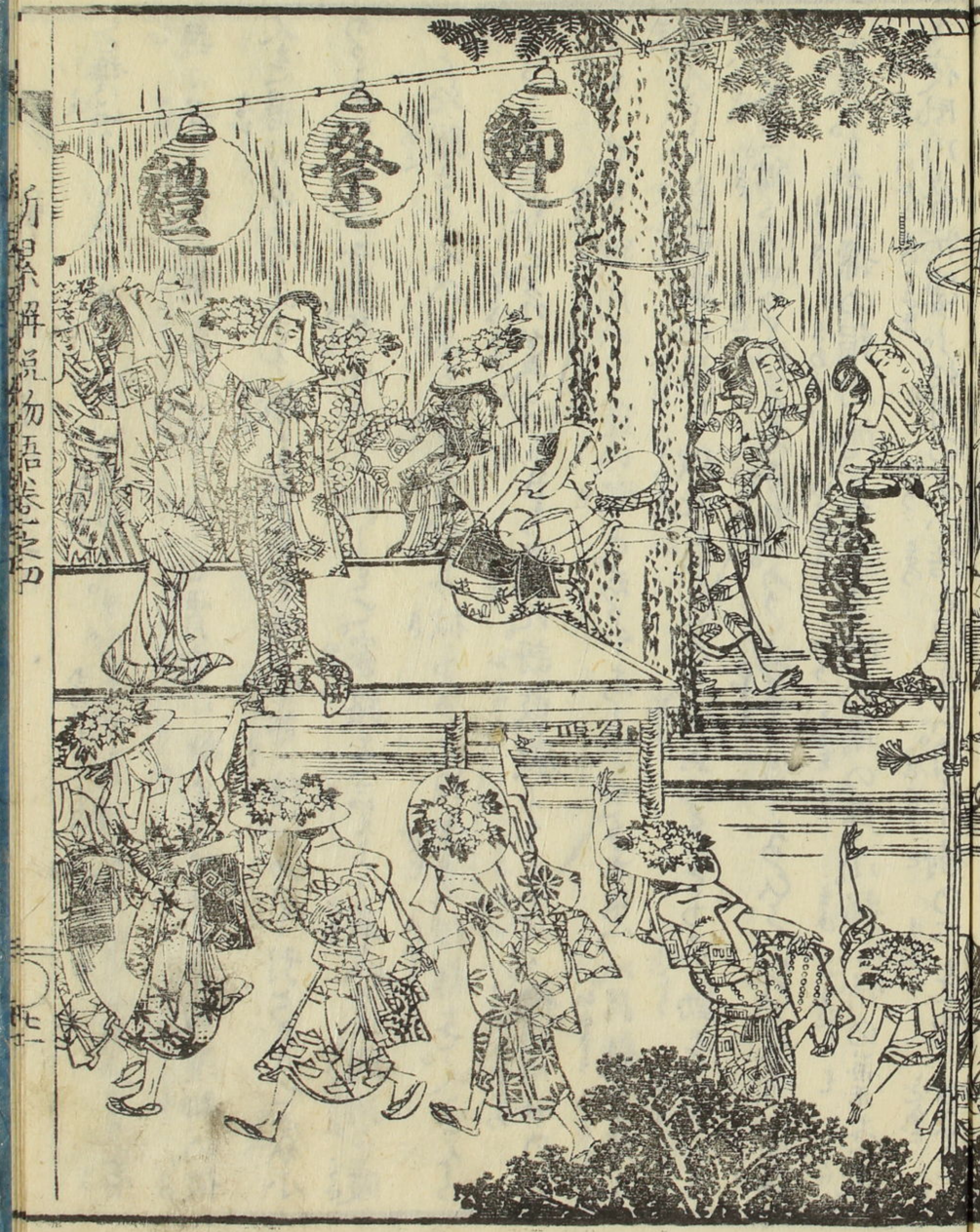
ひ慌しくも物のあへうるおぼえれい法恩寺村へ家うつるべくとり急ぎ
さんさほうくわうく煩しくうるさく跟ようり。未あくとひろみく。再び走て去らんと
するを累ハ引留うる袖を放さぢやくくひうらへあくども。誠よ訝敷戯うふ
あれかくうるぞや利鎌を携ゆふと同れてありかぼうら殺るな背ハ隠す
鎌の柄も。挟む袂よ畏ミ難引うく隨ハ撲地とやうと夫の顔をつゞくうく。
意ハ稱わく妹と脊くとも。妻とも。ふれ夫と脊眉幷月ともうりわれば假
初るうわ恩愛を。外くしけハおりうく。むつうな亡夫の常うあれど善
悪を。ろうくうるをうゆうぐ。恨もとハ。歎ハ七とハ。さすがハ昔ハうとう
の引ハ引ゑわ故あうて。人を傷ハ。身を喪ハも。道理よ稱ハぐ留ハかゆく。
やえぬとうなに說。禍縷うぐうの勝の上ハ。涙の川の瀬をつうるまくぐ泣生
どゞをえくうろ右歩つも。数回嘆息くゆとうく。縁由を告ざうふあ
うらどしハ。身ハ歎ハを面めうゆえんもりの憂われいのうまうくな恨
とぢのひそ。羽生の軒のまのぶうもるのほ恐ハれれ。仇の並ハ今霄敵ハ果」
う折よくハ。ハ走るべく。又うるうぞハ。自殺をべくと生死一つを
ハ一つハ。ろひめまりうくろハ出うんぞの面影ハとまれうくまれ操負くを吾
妹るまおくれとうく匿ハ放ハうれそおのハ信るうされど問をうくる時告
ぞハいうく疑ひのべくれハ縁故をまうくするこうくハうる日。千葉家の走卒
小行のくハ小昔父権うる巫が田糸姫を隔並うりとハ風声ありとひを男
よゆえうくハうべうハ才のろうべハよう子がるハをまれるうハ又去年の秋
学績が為ハ潔られうくハみ實の罪をハうりうるハ一五一十残物うこうそ
いのう父が舊悪ハよろうくぬうびハ罪をハうとうもそうハ人ハうくハやるの
ろれ過るうくて左迂ニ彼妬婦が奸計うよれりとあうるハうそも久

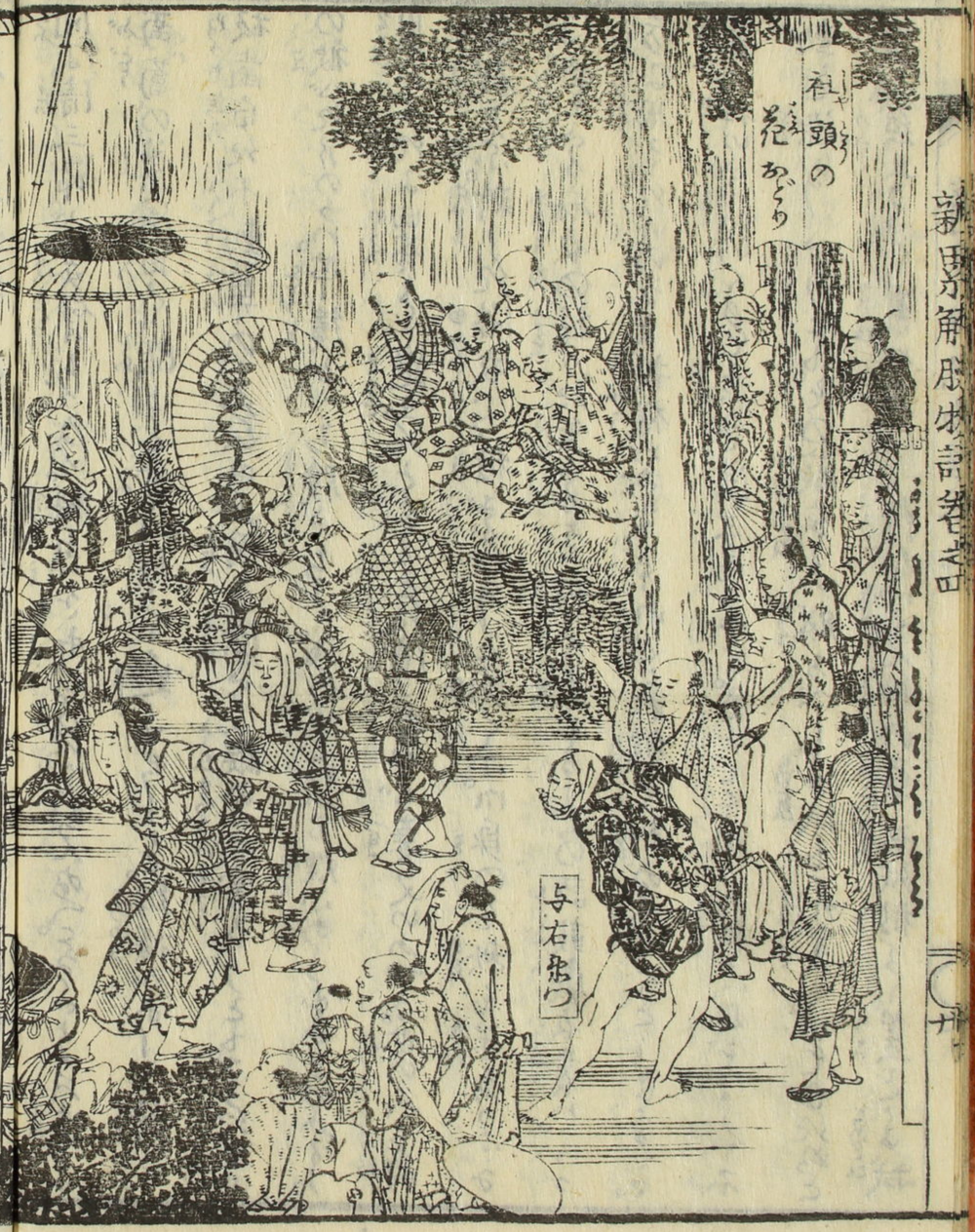
後にのりしげるは村落に老たんより。憎しとおもふ苧績を殺し。活る
ともたるとも存亡は天に任せべうとふ。賢は人の後に生て短慮をとこそ
笑はゞ笑へ。ひ絶ても堪ぬ。胸に焼火のぞくく滅。翌は煙と立のぼる。つ
ひの別ともなるならば。亡迹よはに吊てよといひかけく涕うちかめば。累々
生くに沙ましくてさへり落る涙をかれ拭ひ。縁故を生ける小。皆是因
縁あるまゝ。理ならぜともいひがたけれど。こゝが身初はより。彼家の艱苦
にくく。今しく人となりぬれば。外に生て己なんすは本意ならねど。世間
の婦のうへには。夫に心ひかるものなし。壯夫の意氣地とせんかくもふ
決ぬべきにてうとりなく留め給らん。かゝるべしといひきや。今宵もこゝが夫
の寢酒にとて。買こく置てし茶蘼漉は。飲てけぬべとて酌こく生を清
れども薄濁。茶碗の染の暦にふ。けふを悪日ならんとは。身に憂閨の別路

より。なほ恨しは入相の。鐘鎬くと生なれば。与右衛門は時や後はんとて。
酒飲乾こく累にさすは。押戴はこくもてしうけ。涙とも小飲をはり。ぬ
こゝび夫に進らせはば。あらくとつゞして一息に。丁と投はば茶碗も胸も共
に碎るばかりにて。利鎌引提ゆく夫を樹かつくまゝぐ目送りて。ちじめ
こくよくと声ゆり立。撲地と物びて泣沈え。且くして頭を擡。怜悧けれども
血気に勇え。その身を忘はぬべるは。まごうらうは故なれば。諫るとも止り
ぬべ。とゆふ心を鬼にして。放遣まゐらせられど。しりつく夫に人を殺させ。心地
よしとする女子が。夷の國にもあるへはか。殊さら彼家の夫婦にはこゝが身孤
となりしより。守り養はし高恩は。實の父母にもなほ勝はり。されはとて
夫の善悪をあらはに告んせうなれば。とかく詐りこく彼人を今宵家に
ぶに在せなば。夫も空しく帰て来こく。恩ある人の愛子も殺さぜ。夫がう

へ小恙なくは。恩義の二ツを全せん。しかるありとひとりとち。帯引締
ろく喘く法恩寺村小走りゆれ。さもあらねおもくちして。清三郎が家に到
りて。こゝろはも雜魚の魚交ことゆらん。訝鼓戯にてさ小参り仕り。苧績小
は彼処にもや赴れぬひしかと問は。清三郎夫婦ひと苦くしれ[illegible]。されば
とよ。吹ぬへ。ゆふの晴被にとく染さしたる。草衣の摸様を。紺掻が図あや
まち。今朝縫立てくりて来られど。さるゑせ摸様にくは世の胡慮となり
るん。さはあれ別小染させんも。頓のくすにくす整はぞ。しからば訝鼓戯會
小行じとく。苧績はいとはてうむづかりて。衣引被ばうち卧たり。實は彼を
慰んとく。ひ立にしるすの化小ありし本意なさ我察しぬへといふ。累は思
ひ合するもあれば。まづ心おちかてしらぜ顔し。さまくしらひ企るがら。今宵
の試楽に出ぬはねは。さとそ遺憾からぬ。それはいかなる染摸様にて仕りと

問に。清三郎が妻臂ちかなる。袱包を打ひられ。これにんぬへ。こなたよりは這たる
葡萄の。葉紙白く染よと書つけて遍与せしを。紺掻があしう讀て。
板歯白れ不動尊の。よがひぬふ所を染たり。縦祭衣裳なりとも。ゆれ女子
の被ばれものかは。苧績がうち腹たちて。ゆかじといふも理にあらずやといふ。
累はよれに回答して退出んとするとれ。清三郎が妻又いふやう。世の人は訝
鼓戯にて。新しれ浴衣一ツ被ざるはなしと聞く小。れ身のこと秋も半なるに。な
ほゆもたる麻衣の裾かれ垂たるを被て在するよどの訝鼓戯衣裳は。ゆうが
方に用ゆれものなり。摸様めざましかれど。これ被て行ぬへとてとらせしぞ。
累は押いたがれつく。もて立を。清三郎にて。などてとふて被かへねぞ。よしや不
動を染ましたりとも。その蔽衣には勝るべし。よ拭も花笠も。もてゆれねと
いふ小。然止がたく。累はしばし飲び。ゆえん件の草衣我被て。笠とも拭


御
祭
禮

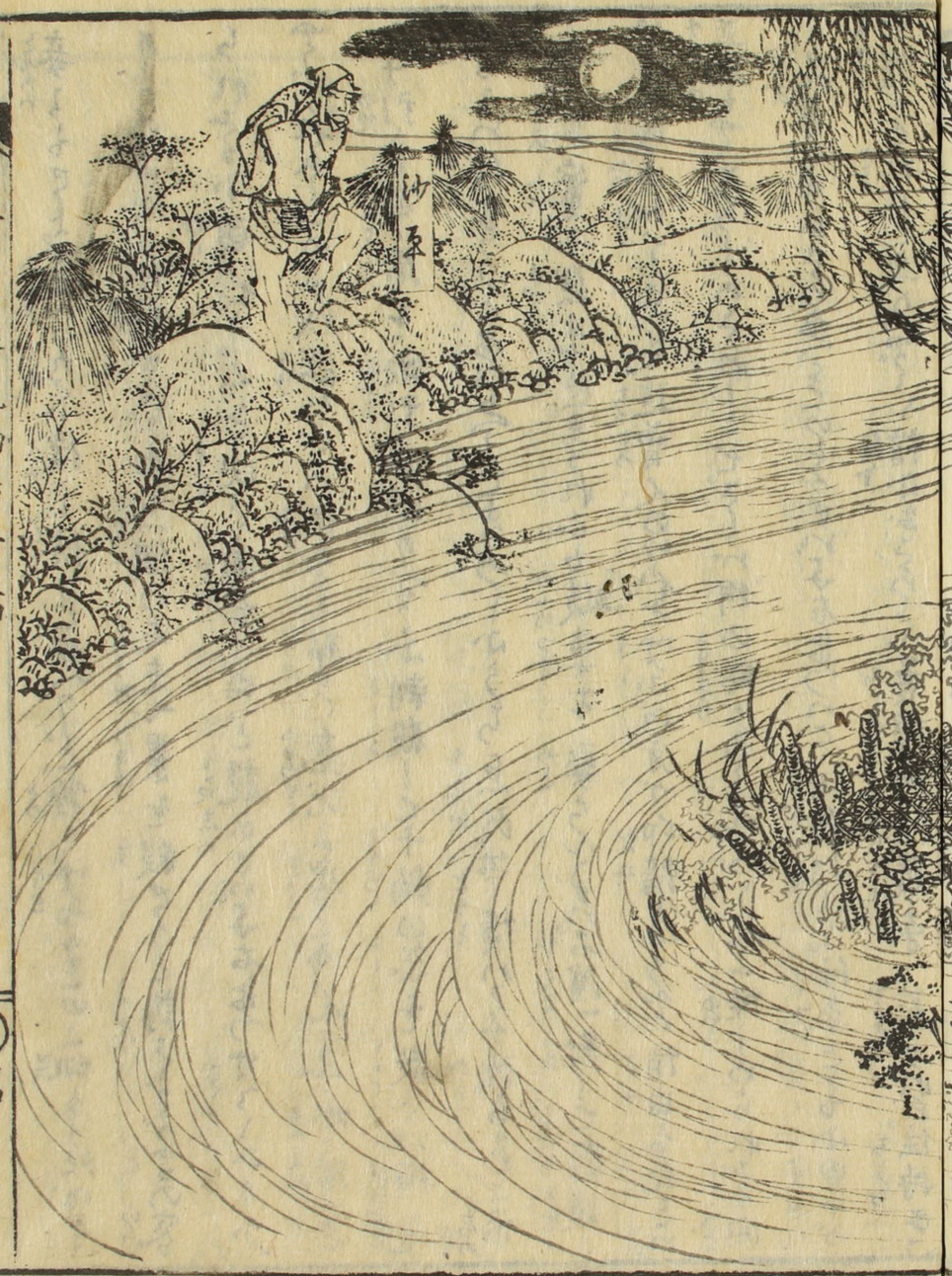

社頭の花おどり
与右衛門

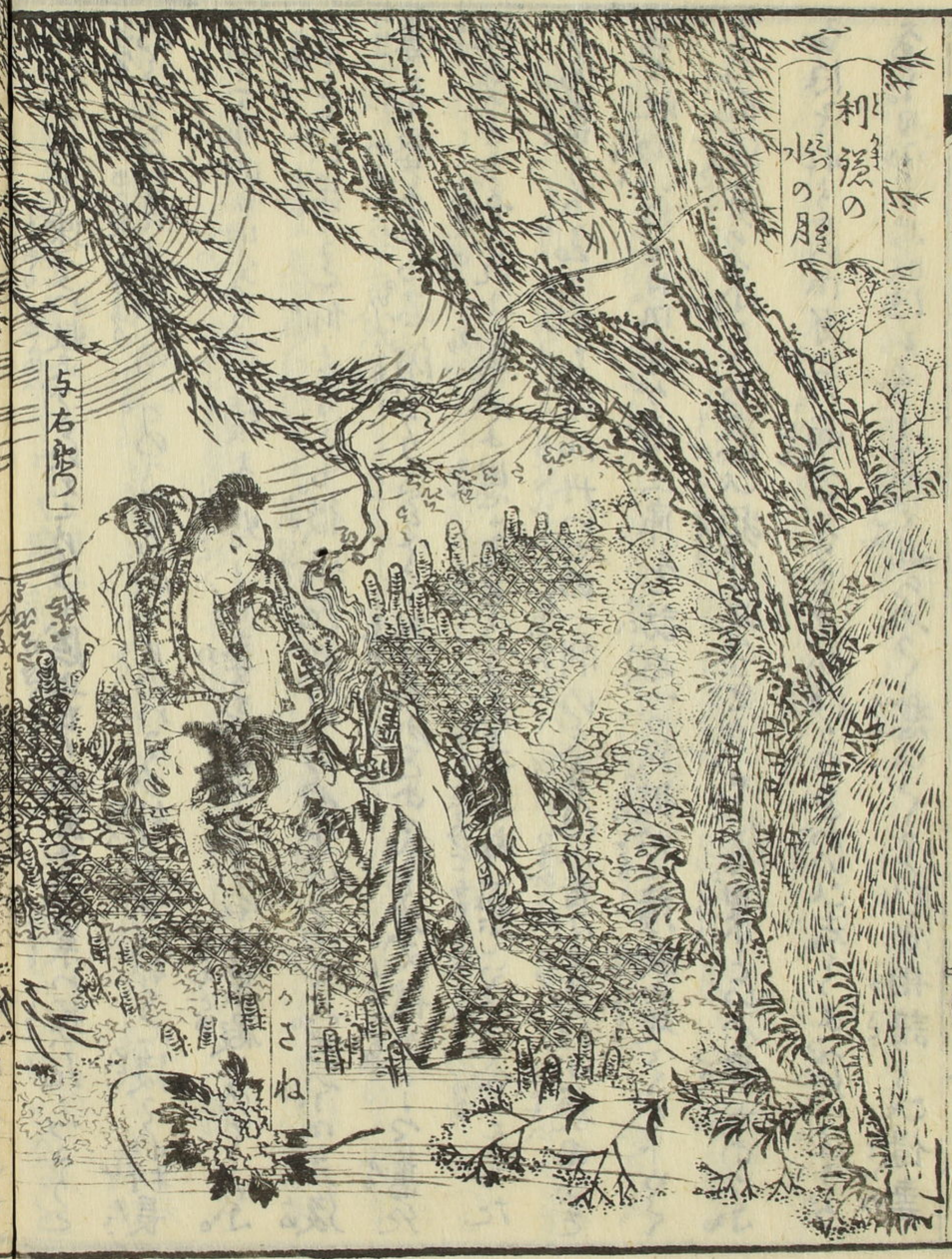
を携。ぞかく清三郎が家に立出て。まづ天地を拜礼し。寔に心ふより有
無に安しといふ。常言の空しからで。霄宮に穢あらせじとて。城隍神の。彼
人を退けぬふか。又ゝが誠をあはれとぬふか。苧績がかく引とりて。家に
あるまはれたるらざる幸なりとうれしとて。家路をこゝろ立つる。絹川を渡
るとて。跟ようの人の来る音すれば。ゝが彼もなきね伊達模様を。人にかんら
まとく笑はれじと。花笠かくとる戴て訝鼓戯より立つる。郷の少女のお
のくちして。今踰川は三途の瀬と。あるやあらずや与右衛門は。只顧苧績に
逢んとて。訝鼓戯の隊を彼此といくたびか索めぐれども。不動を染ぬる
草衣を。彼なる女子のみえざれば。かく望をましまひて。いひかひなくも過
て来る。ゝが目標の絹川陰。吳山寺が淵の南の岸に。招く柳の葉を茂
せ。夜風川音物凄じ。月の光に佶とみえれば。目今樹の下をあく女子とて。

まがふべうもあらねその人なれ。やは迯さじと走りて。いかるや苧績。金五郎
ぞ。怨はいはぐもありつらんと。名告もあへず鎌かり揚。腸かく打こんで水
中へ引倒せ。累はまゝく声吹あらく。喃ゝが良人といはせもせるぞ。破衣をまと
せ鎌とりなほし。ぞかく吭を掻断なり。憐べし貞實の女子。父の因果を
身に負て。仇とあやまつ夫がくまに。かゝる非業の死を遂し。ゝが恨の糸
柳の下を今かく累が淵と。彼郷人は喚とりや。与右衛門は既に死課て。
まづ彼此をみんかへりつゝ。簾を腰にし。尻の襟上引起し。花笠引断離て
熟みんとは。苧績にはあらずしてゝ。ひとりけぬ累なり。とはいはもいかりと
驚て鞅学ゝ。れにもあらず亡骸を。砂の上に抱あげしが。愀然としていへり
なるは。今猜せる小妻は亦。養育の恩義に羈せ。苧績にかゝりて死
なりけん。原来これは左迁の命に拠よとある妻を。むざんに殺しこく罪を

うさね。累はともあれ千葉殿の仰にさへ悖りしかば。脱果べき身にあらず。
己なんぐとひとりこち。ゆるくび鎌を抜とつく。肚へ突さてんとする折し
も。ずをれ行ぬへと呼びかけて。掛稲の蔭より跳出つ。腕をしかと握留る
を。誰そとうかれば。与右衛門が友なりける。法恩寺村の沙平なり。与右衛門
は騒ぎたる気をもなく。かくしらるくうへは匿によしほ。今人さがへして累
を殺し。君命にも悖りしられば。とても存命身にしあらず。其処放しぬへと
焦燥ば。沙平声を低しくうなるしも自殺に及ばず。もしうがいふ所に
随はば。此身に恙なきのみならず。美女を媒すべし。いかにうが媒を用
ひぬかべきといふに。与右衛門かく不審ゑ。死するは易く生るは難し。その
難をなし得ん媒。いとおぼつかなくこそといふ。沙平まづ利鎌を棄て後方
に掻遣りなほ膝をすゝめて密語りけれ。久しく人の為に媒ちんなを

諾ひたれど。速には整がたきのくに然止せり。此身まづ累は頓死したるとも
仍なく。この暁に葬ぬへ。このなきしれるものはうが外になし。かくて後これ村長
清三郎の女児なる。苧績を媒して妻あはせべし。よしや千葉殿そのまゝにせに。
累とそひ果ると仰せるとも。彼病死せりといふをいふにせん。そのかに此身後
妻を娶るとも。石濱よりこゝへく外ぬかをするべからず。又彼女子にて舊れ
仇なりとも。今仇に報ふに恩をもつくせば毒石却薬となり。命をもた
のち。富にもなる。不死の仙丹はこの一剤のみ。なほ審に告べき。疑ぬかを
なられ。抑いぬる日。此身が清三郎を訪ぬへる。彼苧績闕窺ふ。まじめく
その風流士なるにこゝち惑ひ頻に思ひを焦せども。累といふ妻もあるに。
なほそれよりは此身にて。面ぶせなるなきおほうめまじ。いひしらまべきよすが
なし。日に〳〵思ひほそりしかば。父母はかく愁ひくれを相語らひ。傍妻


沙平


利鎌の水の月
与右衛
さね

妾なもせよ。女児が為に縁し結してゐへりしと頼ミ申ゐるといと切なりけれ。此身
もしこのゆゑうけ引ざれ。これも一個の丈夫ん。累を殺せりと訴ふ。ゆゑ言の容
られざる小殺ふべし。ふと決ふく回答しゐへと説示せば。与右衛門はうゝおもふ
ゆゑ。これ今しこのゆゑ諾ひざれ。仇をも軽ひで忽地に虜となるん。まづ婚縁をこ
うけ引ふく。苧績を弛引よせ。おもふまゝ刺殺して千鉤の怨を散らば。横死
せらるゝ猶ありと思ひかへして。まづ〳〵小うち点ひ。苧績はうが仇なるとこ示
さるゝ。和實小懲止がしき。おもれども後妻を娶らんなれ。石濱へ對して影護こ
ひふを。彼卒ゆゑもあつぞ。近曾人のひふを申ふ。此身が印幡とあらんと悟由なれ。
正胤もせ〳〵しめられしとぞ。さらば何の妨りあらん。とく人に怪しめられざる間
小。屍をとりおさめゐへとていそがせい。与右衛門はこゝろ成ひ。沙平とも小累が
亡骸を扛めてかへり。ぞうく棺小おさめゐく。菩提所法藏寺へ葬られ。住持せ

ゐはち香誉妙林と法号しく。追善形のごとくとり行ひぬ。さる程小与右衛門が
妻の忌ども果しなば。沙平媒しく苧績を妻せる小。彼は村長の女児なれば。
齎らし来せる調度なども。貧れ家なれ似つかしからぬとて。人ゝな羨ミの
のしる小。与右衛門はさるゝ小ところ減りけど。假ようけ引く婚姻なれば。笑の中
小刃を隠し。ゆゑ身の仇累が仇。宿志を遂んゐ今宵にありとまつ程小。
その日の黄昏に苧績は死ぬ小襲飾こく。媒妁沙平小伴せ。二三人の奴
婢をおくへり来るを。与右衛門は奥まりたる処小迎へ入れたゞ。ぞやて彼
女子をうる小。雪まづりに姿なよ。ゆゑて。花にも勝て月にも芳るまじれ美
女なり。おもふ男に締縁しの。娯しさ袖小あまりたる留奇南の薫さへえなるぞ。
秋波しばしばよせて。春心動ざるもの稀なれば。与右衛門はこの形容を見たく
忽地勇氣撓ミつゝくとゆゑ。ゆゑれ不幸にして醜女を妻としたれど。今ちう

らざりしこの佳人にはられ。志りも村長の壻となれるなり。あれは助るはあらざ。
其を仇とし殺せしとも。これは干こくさらに益なし。且苧績が印幡を相語こく
これを寃なるは。給ふるの乃ふ志こく。君我ゆゑのかりは小起こ。加旃累が彼なかは
こゝく死せしは。艱育れたる恩義によりけん。志りことは今霄苧績を殺さん
なれば亡妻の志にも悖るべし。猛は大きさら尾を伏せ友を囓ぜ。今この女子を
其をおもふといとゆるは小。いつで當べは刃のあらん。且くその行を試てとも
かうもせめと尋思し。一夜二夜と相語に。ぢじめの怨川へ。恩愛互り
孫ましけり。清三郎夫婦は。苧績と与ならがいと睦しはをみてかく欲び。
媒妁沙平には。川出物鞍とらし。又与右衛が家へは。行にまれ乏しからぜ贈り
し程に。衣食既に足れり。かくて次の年。苧績懐胎て女子を生かれば。
これをさくと名づけく。愛慈と大きなるぞ。寔に始ありて終なれば世間

の人とゝろにて秋の雲の後るに甚れ浮たるものゝ常なれどこれにて与ならず
苧績がどれは。永を憎こく臭を愛し。泥を厭こく汗を諱ぜ。抑も小惑ひ
こく仇に狎其富をおもふて義に違ば。亦是氷の碗に熱湯を盛て芦
の葉に猛火を裹に等く。こゝろく久しく持がたし。悲しはかな。前世の
悪業とに報ひ。積悪の餘殃遂に脱其ぜ。畢竟この夫婦がうへに。又
いかなるものあるべは。その次の巻に解分るにて志らん。

新累解脱物語巻之四　終